

要旨

1 研究の背景・目的

スリランカ民主主義共和国は、1970 年～2009 年まで民族対立による内戦が続き、2004 年にはインドネシア沖地震津波の被害を受けた。戦争という人為災害と地震津波などの自然災害は、人間の生活や健康に影響を与え、子どもの場合はその影響が大きい。そこで、内戦及び津波被害を受けた地域の思春期の子どもの健康状態を調査し、性差による比較、子どもの身体的・精神的特長を明らかにすることを目的とした。

2 研究方法

データ収集期間は 2009 年 7 月 13～17 日、研究対象者はスリランカ国北東部トリンコマレ県の公立中学校の 12～13 歳児童 400 名と児童の担当教師 20 名とし、現地語翻訳の質問紙を用いて教師による児童の聞き取り調査・身体計測、および教師への質問紙調査によるデータ収集を行った。

3 結果

対象児童は女児 178 名、男児 221 名、計 399 名で、「内戦」や「津波」を経験した者は 328 名 (82.2%) であった。児童の身体的自覚症状では「頭痛」「胃痛」「食欲不振」「関節痛」が男女児とも多く、しらみは女児に有意に高いものの、性別による差は認められなかった。ローレル指数による発育評価では、女児の 63.5%、男児の 80.1%に「やせすぎ」と「やせぎみ」が認められた。精神健康度スコアは、「内戦体験者」が「内戦と津波体験者」よりも低い、性差による有意差は認められなかった。

担当教師 20 名から見た児童の身体的健康は良好とされ、内戦および津波の影響を精神的健康に挙げた者は半数以下であった。教師の認識による児童の問題は、学習に集中できず、保護者の養育が行き届かず、児童を取り巻く環境では、コミュニティにおける互助と暴力が見られ、食料流通が悪く、近隣の医療機関は少ない。

児童の健康に影響する要因では、学校は給食が提供されて安全な場所と認識されているが、家庭環境では、親や養育者の不在、親の養育無関心、住宅の衛生設備、食料栄養不足などが挙げられた。

4 考察

児童の身体的健康では性別による有意差はなかった。身体的症状は、思春期に特有な心身の反応と考えられるが、体格はスリランカ国内との比較でも「やせ」の傾向が過半数以上に見られ、身体発育はよいとはいえない。その背景には、地域の生活環境・食料流通が悪く、家庭の養育環境が悪いことが示唆され、内戦や自然災害が地域の荒廃を惹起し、子どもの発育に影響を及ぼしていることが推察された。